

法律相談10/15(木)

税金相談10/26(月)

インボイス相談も
同日に受け付けます。

詳しくは支部へお問合せ下さい。



けんせつ北部

(購読料は組合費の中に含まれています。)

定価三十円

発行所
東京土建一般労働組合
城北ブロック会議
東京都豊島区西池袋 5-22-15
電話 豊島 (3986) 2471
北 (5390) 6021
板橋 (3963) 5325
練馬 (3825) 5522
発行人 寺島 耕平
発行予定日 毎月4回
1日、9日、17日、25日



(左) 原爆ドームの前で、白井さんと川口書記
(右上) 豊島原水協の仲間たちと
(右下) 会場の県立総合体育館グリーンアリーナ



対話を通して築く「思いやり」が 平和な世界を実現する 一歩になる

—「広島原水爆禁止2026
世界大会に参加して」

白井 理八 池袋分会分会長

第二次世界大戦の終結から21年が経った昭和41年に生まれた私にとって、平和は当たり前のものであって、戦争の話は人から聞かされたり、テレビを見て知るぐらいでした。私が中学生の時に社会科の先生から「今、世界には地球を4回壊せる量の核兵器がある」と何度も聞かされました。それから45年経った現在の核兵器は、広島で使われた物以上の威力を持ち、世界には1万2千発を超える核兵器が存在すると言われてます。現

に大国による力での現状変更や、ウクライナ情勢などの影響で、核による威圧が現実味を帯び、核の脅威は広がる一方です。

81年前に広島と長崎に投下されて以来、実験を除き実戦で使われた事はありませんが、世界では「抑止力」として保有する国が後を絶ちません。事実、日本も韓国も、米国の核の傘下によって平和が維持されているのでしょう。

抑止力を持って敵対国を威嚇する

効果は、主なところでは米ソの冷戦がありました。逆に効果の見られないところでは、インドとパキスタンによる、カシミール地方の領有権を奪い合う激しい紛争が今なお続いています。

初めて訪れた広島で、原水禁世界大会への参加と原爆遺構、広島平和記念資料館を見学しました。原爆により街を焼き付くし、大勢の人々の命を奪い負傷させ、後遺症の苦しみを与え、偏見や差別を作り出した惨状を記録した写真や遺物からは、核兵器の恐ろしさと同時に、核兵器を作り使用した人間の愚かさに対して、怒りを覚えながら真相を学ばせてもらえました。

大会プログラムでは、「核兵器と人類は共存できない」と訴えています。核兵器が抑止力を失って使用された時には、甚大な被害と地球規模での気候変動や放射性物質の飛散、各国による報復の連鎖へと発展してしまい「人類にとって取り返しがつかない事になる」と、この国際会議の識者は唱えています。

環境問題と並び、核廃絶は人類の喫緊の課題です。また今大会では「被爆の実相を広げる取り組み」を掲げています。広島には世界中から被爆の実相を見学するために多くの人々が訪れています。凄惨な記録をその

目に焼き付け、心の深くに留めて自国に持ち帰り、戦争の愚かさや平和の尊さを広く伝えてくれることを願っています。

大会では、4才の時に被爆体験をされ、現在では広島のピースボランティアとして活動されている伊藤正雄氏が、「憎しみや敵討ちからは平和は生まれません、愛と赦(ゆる)しいの思いで、多くのお友達を作ることこそが、平和の原点」と語ってくれました。多様性が重視されている現在では、まず相手を理解して尊重する事から始めたいと思います。自分の考えを押し通し、自分の意見を優先させたいと他者を顧みない利己主義的な言動は、反発・反抗を生み、それが全ての争いの源となってしまうからです。諍い(いさかい)から争いに、やがては兵器を用いた紛争、そして戦争に至ってしまいます。常日頃から対話を通してお互いを理解し、支え合い助け合う和やかな関係を築く「思いやり」の心がけが、平和な世界の実現に向かっての一歩になると信じています。

今大会の参加にあたって、東京土建豊島支部全分会の協力と職場の理解に、そして有意義で貴重な時間を共に過ごさせていただいた、豊島区原水爆禁止協議会の皆様に心より感謝いたします。ありがとうございました。

平和は当たり前存在するのではなく、 人々の努力によって守られてきたもの

— 2026年広島原水爆禁止世界大会に参加して

書記 川口 和也

2026年8月4日から8月6日にかけて開催された世界大会広島に参加しました。期間中は、開会総会、分科会「青年ひろば」、閉会総会に出席するとともに、広島平和記念資料館と袋町小学校平和資料館を見学しました。今回の研修を通して、被爆の実相を学び、平和の尊さや核兵器廃絶に向けた取り組みについて深く考える貴重な機会となりました。

8月4日の開会総会では、被爆者の体験や各国の平和運動についての報告を聞き、戦争や核兵器がもたら

す悲惨さを改めて実感しました。特に印象に残ったのは、「被爆者の声を次世代へつないでいくことが私たちの使命である」という言葉です。被爆から長い年月が経ち、体験を直接語ることでできる方が少なくなる中で、私たち若い世代が被爆者の思いを学び、次の世代へ受け継いでいく責任があると感じました。

8月5日の分科会「青年ひろば」では、全国や海外から集まった青年たちと意見交換を行い、平和についての考えや地域での活動について知るこ

とができました。同世代だからこそ率直な意見を交わすことができ、平和活動は特別な人だけが行うものではなく、一人ひとりが身近なところから行動することが大切だと学びました。

分科会終了後には、広島平和記念資料館を見学しました。被爆者の遺品や写真、証言映像などを通して、原爆が一瞬にして多くの命と、それまで当たり前だった日常を奪ったことを知りました。焼け焦げた衣服や日用品など、実際の資料を目の前にすることで、これまで知識として理解していた原爆の被害を、より身近なものとして感じました。一人ひとりの被爆体験には、それぞれの人生や家族の歴史があり、数字だけでは伝わらない現実があることも強く感じました。

8月6日の朝には、袋町小学校平和資料館を見学しました。校舎に残

された伝言や、被爆直後に学校が救護所として利用されていた様子から、被爆した方々が必死に家族を探し、生きようとしていた姿が伝わってきました。

その後の閉会総会では、大会全体を振り返り、核兵器のない世界の実現に向けて、一人ひとりが行動を続けることの大切さを確認しました。今回の参加を通して、平和は決して当たり前存在するものではなく、多くの人々の努力によって守られてきたものであることを学びました。

今回得た学びを一時的な経験で終わらせず、日常生活や地域活動の中でも生かしていきたいです。被爆者の方々の声を忘れず、戦争や核兵器の恐ろしさを周囲へ伝え、自分にできる平和への行動の一つひとつ積み重ねていきたいと思っています。

平和特集号に寄せて

豊島支部教宣部

アンケート

2026年2月にアメリカ、イスラエルが突然イランを攻撃し、イランの最高指導者を殺害したことで始まったイラン戦争は、同月イランが報復処置としてホルムズ海峡を軍事封鎖したことで、石油化学製品の原料となるナフサの調達に支障が生じるなど、オイルショック以来の経済的混乱を世界に招いています。

質問① この数か月の間で、資材・材料の調達に不便は生じていますか?また、それらの値段に変化はありましたか?

質問② 質問1で不便を生じている、値段の変化があると答えた方は、こうした事態があなたの仕事や生活にどのような影響を与えていますか?また、こうした状況にどのように対応していますか?

質問③ 中東情勢(イラン戦争)の悪化は、原油高や物流コストの上昇を招き、エネルギーや日用品の物価上昇を引き起こしました。これにより家計負担が増加し、購買力が低下し、消費者の節約志向や不景気感を強めています。こうした状況を肌で感じて、戦争に対する考え方や平

和への思いに変化はありましたか?

質問④ 政府・与党は早期の憲法改正に向けた動きを加速させており、2026年6月には関連する国民投票法改正案が衆議院を通過しました。憲法9条に自衛隊を明記することを目指しています。海外での武力行使や集団的自衛権の行使範囲が拡大することは無いと政府は説明していますが、自衛隊が憲法上の正式な実力組織として認められることで、同盟国の軍事行動への参加や、これまで憲法違反とされてきた海外での武力行使を伴う活動への法的ハードルが下がり、事実上の海外派兵が可能になるのでは?との懸念も示されています。あなたは憲法改正についてどう思いますか?あなたのご意見をお聞かせ下さい。

質問⑤ 中東情勢の悪化によって、国内の建設業は大きな打撃を受けています。また、帝国データバンクの調査によると、2026年7月は即席麺やパンなど2,500品目以上の飲食料品で値上げが実施され、私たちの生活を圧迫しています。それまで戦争や紛争は対岸の火事として、自分たちの生活に大きな影響はないと高をくくっていた日本

教宣部会では、平和特集号発行にあたり、平和についての考察のため、建設業に従事する仲間やその家族に、現在進行中の「2026年イラン戦争」による、仕事や生活への影響を聞き取りながら、戦争や平和について対話し、それを各自で記事にまとめることを決めました。仲間の考えや思いを聞き取り、対話しやすくするために以下のアンケートを作成しました。本号の紙面の都合上、次号にも引き続きこの企画を掲載しますので、読者からもアンケートへの回答があれば掲載いたします。

人に対して、多くの気づきをもたらしました。また、巨大与党の出現によって憲法改正が現実味を帯びてきたことを含め、戦争とその対極にある平和について、見方や考え方に変化があったら教えて下さい。

質問⑥ 人類が戦争を繰り返すのは、生存本能や利益を求める「①人間の本性」と、それを統制する強力なルールが存在しない「②国際社会の構造」、そして資源や思想を巡る「③複合的な対立」が主な原因です。

今回の米国・イスラエルとイランの紛争は、米国、イスラエルの自国の影響力の拡大、防衛といった生存本能(①)に基づいており、核開発問題や、親イラン武装組織(ヒズボラなど)の攻撃に対し、国連などの国際機関が強力な調停や強制力を行使できない国際社会の構造(②)、そして、イランのイスラム体制と、西側諸国の民主主義的な価値観の対立(③)という前述の3つの原因に当てはまります。戦争をしない、させないために、日本は国際社会の中でどのように行動するべきだと思いますか?大変難しい問いですが、ぜひ考えてみて下さい。

●77歳 タイル工

①物価高騰はすさまじい「特に石油の値上げ、関連する商品などありとあらゆるものが、上がっている。③他国の戦争が、当事者同士でなく世界中つながっている事を感じた④終戦から今年で81年目です。先の大戦の後、平和憲法の下に生まれ、生きてきました。「不戦の誓い」、「戦争放棄と戦力不保持」。憲法9条に自衛隊を明記しなくても日本国民からはすでに自衛隊として軍隊ではなく認知されている。⑤世界が認める平和憲法です。憲法改正には反対です。⑥戦争をしない、させない為に、日本は国際社会の中でどのように行動すべきか?戦後日本は民主主義、自由主義経済(特にアメリカ)のもと今日に至っています。冷戦の頃は、アメリカがソビエトか、白か赤かという二極に分かれていたが、現在はそうではない。アメリカと同盟を結んでいるが、NOといえない日本ではだめだろう。国連での発言など、日本として明確な態度(核兵器廃絶)で望んでもらいたいです。

平和特集号のアンケートを、夫に書いてもらいました。私達は、戦後のベビーブームの世代です。まわりには、戦争の悲惨さを経験し「戦争は二度といやだ」と思っている人がたくさんいました。今、戦争の悲惨さを知っている人

は少なくなっていました。

高市政権は、平和憲法を変えようとしています。戦争ができる国にしようとしています。武力では平和は作れません。平和を願い、改憲に歯止めをかけていかなければなりません。

(新井睦子 南池袋分会教宣部長)

米国とイスラエルによるイランへの軍事攻撃が引き金となり、ホルムズ海峡の事実上の封鎖で、エネルギー供給が途絶えるという深刻な事態が発生し、いち早くナフサ由来の資材高騰や材料不足が建設業を襲いました。左官業の息子にも仕事への影響が出てしまったのではないかと心配になり、様子を聞いてみました。

「使用している材料は、石油製品がメインではないため、今のところ材料不足や値上がりは起きていない」と言いながらも、ナフサ不足を心配しています。「周りの建設現場では、材料不足のため仕事にならず、工事が請負えない仲間も多く他人ごとではない」と、政府の言っていることと、現場のギャップはあまりにも大きすぎると呆れた様子で、「もっと現場を直視し、対策をとってほしい」と訴えています。

中東情勢の悪化に歯止めがかからず、経済的不安や戦争への不安が高まるなか、戦争に対する考え方や平和への思いなども聞いてみました。

「日本は世界で唯一の被爆国でありながら、再び戦争への道へと踏み出そうする動きが強まってきて危機感を覚える」と声を挙げて「戦争ほど愚かなものはない、戦から生まれくるものは憎しみだけ、何があっても戦争は絶対ダメ」と力を込めました。

高市政権が数の力で強引に推し進めようとしている憲法改正についても、「憲法9条は世界平和の希望、憲法改正など国民は全く望んでいない、国民のくらしや命に寄り添わず改憲有りきの高市政権には失望している。正しい戦争なんて絶対あり得ない」ときっぱり言い切った息子の言葉は、平和を希求する思いでいっぱいでした。私の心も救われました。

戦後81年、激動する国際社会のなかで、今、私達の成すべきことは何か、武力から平和は生まれません。不戦平和を主体にした「憲法9条」を守り抜き、日本国憲法の平和の理念を世界中に発信していくことが、国際貢献に繋がる道だと信じます。

(間辺美恵子 南池袋分会教宣通信員)



女性の会 平和のつどい 映画鑑賞会

8月21日(金)、豊島支部会館にて「平和のつどい」を開催しました。今回は、戦時中に軍用犬として戦地へ送られた犬「アルマ」を題材にした映画「さよなら、アルマ」を鑑賞しました。

映画では、家族のもとを離れ、軍用犬として戦地へ送られたアルマの姿が描かれています。戦争によって人間だけでなく、動物たちも命や日常を奪われていく様子を通して、戦争の悲惨さや命の尊さを改めて考えさせられました。最後まで人を思うアルマの姿に胸を打たれ、参加者からも「動物の命までも戦争に巻き込まれるを感じた」「何気ない日常を過ごせることが平和なのだったと思った」などの感想が寄せられました。労働組合としても、働く人の暮らしや命を守るためには平和が欠かせないことを考える機会となりました。

鑑賞後は、社協の活動を通じてつながった大塚応援カンパニーさんのお弁当を囲んでランチ交流を行い、午後は紙コップを使ったランプ作りにも取り組みました。交流を楽しみながら、平和について考える一日となりました。



豆電球の上に紙コップの傘を取り付けた手作りランプ。思い思いのデコレーションを傘に描いて、オリジナルランプを作りました。